

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成24年4月26日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部直・職名 京 都 大 学 総 長

氏 名 松 本 紘

助成の種類	平成23年度・研究成果公開支援・国際会議開催助成		
事業内容	第17回京都大学国際シンポジウムー第1回AEARU漢字文化シンポジウムー		
開催期間	平成23年12月15日 ～ 平成23年12月16日		
開催場所	京都大学時計台記念館		
参加者	総数 392名	内 訳 シンポジウム参加者122名(国内74名、海外48名) 市民公開シンポジウム参加者270名	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	事業に要した経費総額	(飲食・宴会経費を除いた額)	8,530,98円
	うち当財団からの助成額		4,000,000 円
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) (財)日本漢字能力検定協会、東アジア研究型大学協会、京都大学 全学共通経費、京都大学国際交流推進機構基盤強化経費	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	招へい旅費(海外)	1,672,243	1,672,243
	招へい旅費(国内)	94,000	0
	業務委託費	481,523	0
	広告宣伝費	255,845	0
	資料作成費	505,155	0
送迎費	1,415,668	393,433	
会場費	1,428,028	389,177	
宿泊費	1,525,072	903,472	
通訳費	641,675	641,675	
その他	511,777	0	
合 計	8,530,986	4,000,000	

成 果 の 概 要

京都大学総長 松 本 紘

第 17 回京都大学国際シンポジウム—第 1 回 AEARU 漢字文化シンポジウム—

2011 年 12 月 15 日（木）から 16 日（金）の 2 日間、京都大学時計台記念館にて、第 17 回京都大学国際シンポジウム—第 1 回 AEARU 漢字文化シンポジウム—を開催した。

AEARU とは、東アジア研究型大学協会（the Association of East Asian Research Universities）の略称で、東アジアを牽引する 17 の研究型大学から成る国際大学連合である。このシンポジウムは、松本総長が 2009 年の AEARU 総会にて、東アジアの大学が力を発揮できる特徴のある文化的な議論をするシンポジウムを開催してはどうかと提案し、多くの AEARU 加盟校や本学教職員の協力を得て実現したものである。

東アジアの文化的共通項である漢字を研究し、東アジアが持つ潜在力を発見することを目的とし、これまで人文系の研究領域であった漢字を、社会科学、自然科学の視点からも検討するため、中国語学、漢字学、哲学、天文学、医学、宇宙学などの様々な研究分野から東アジアを代表する研究者が講演を行った。122 名の参加者が集まり熱い議論を交わした。

松本総長による基調講演でシンポジウムが始まった。古代より漢字文化圏に存在していた哲学や、その哲学が東アジア発展の歴史の中で果たしてきた役割を紹介し、現代社会において、漢字を見直し、研究することの重要性について講演された。

つづいて、Chao-Shiuan Liu 中華文化総会会長による基調講演が行われた。漢字は 5000 年以上にも亘り使用され続けてきた世界で唯一の表意文字であり、2500 年もの間、基本的な形は変化していないことから、漢字文化圏の人々は今でも 2000 年以上前の文献を読むことが出来るという点に触れ、この世界でも類を見ない現象の背景にある漢字の特性について解説した。そして、文字は文化の中心であり、東アジアの文化的遺産の継承、文化的交流の推進、相互理解促進のためには、漢字を統一し、東アジアの共通の知識基盤とすることが大切であると提案した。

セッション 1「総論：東アジアにおける漢字文化」では、日本、中国、韓国、台湾、香港の研究者より、各国・地域における漢字文化の現状について講演があった。漢字使用国である中国の Yang Shen 北京大学教授は、現在中国において漢字を巡って生じている問題について講演した。漢字字形を統一すべきか、現在の生活で蔓延している外国語交じりの新単語（例えば、「out 了」（流行遅れ）、「小 case」（些細な事）、「萌」・「便当」・「写真」（日本語をそのまま使用））を廃止すべきか、簡体字を廃止すべきか（もしくは繁体字を学ぶべきか）という 3 つの論争の争点を明らかにした。

セッション 2「近代化と漢字文化」では、東アジアが西洋の近代文明を受け容れた歴史を振り返り、漢字が果たした役割について検討した。パート 1「翻訳語をめぐって」では、東アジアに存在しなかった西洋の概念を先覚者が既存の漢字を巧みに紡ぎ合わせ新しい単語を創造した経緯が紹介された。また、パート 2「伝統的学術・文化の継承と相克」では、自然科学における漢字の役割について、医学、天文学、宇宙学の視点から検討され、今後の自然科学における漢字の使用に対する具体的な提言もあった。

セッション 3「情報化時代における言語と漢字」では、情報学の分野から、翻訳に関する最先端の研究結果が紹介され、多言語間における情報媒体を利用した交流促進の新しい可能性を示唆した。

講演の休憩時間に展示されたポスターセッションでは、中国、韓国、日本から集まった11名のポスター発表者が日ごろの研究成果を発表した。

シンポジウムの最終日である12月16日（金）の午後には、当シンポジウムの成果を社会へ還元すべく、市民公開シンポジウム「東アジアの漢字文化振興と漢字教育」を開催した。全国から270名の参加者が集まった。

市民公開シンポジウムの冒頭、松本総長および高坂節三財団法人日本漢字能力検定協会理事長より開会の挨拶があった。

基調講演では、宮本雄二前駐中国大使（現宮本アジア研究所代表）が「東アジアにおける漢字の重要性について」と題した講演をされた。経済的にも政治的にも近づいてきている東アジアにおいて、平和、安定、繁栄の世紀を築いていくためには、伝統文化を再評価し、東アジアは共通の価値観を保有しているということを再認識することが不可欠である、そして、東アジアの共通項である漢字をより大切にし、理解を深めていくことによって、東アジアを近づけていく役目を果たしていくことが出来ると結論付けた。つづいて、基調講演に登壇された笹原宏之早稲田大学教授は、「日本における漢字への関心—その高まりと背景—」と題した講演を行い、「苺」という漢字を見てかわいいと思うなど、漢字、という文字自体に対して感情を持つ日本人は、東アジアでも特異であると紹介された。

市民公開シンポジウムの後半では、松本総長をはじめ、宮本雄二前駐中国大使、笹原宏之早稲田大学教授、Yang Shen 北京大学教授、Byung-Joon Kim ソウル大学教授、Kuan Yun Huang 清華大学（新竹）助教、Qin Lu 香港理工大学教授をパネリストに迎え、阿辻哲次京都大学教授の司会進行のもと、各国・地域での漢字教育の現状、漢字の統一の可能性について議論された。

赤松明彦京都大学理事の閉会の挨拶で、シンポジウムは終了した。

当事業を実現するにあたり、貴財団より多額の助成をいただきましたことに対し、深く感謝しますとともに、篤く御礼申し上げます。